平成30年度A日程
学力検査問題

①

国　　語

注　意

1　開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。

2　解答用紙は問題用紙の中に挟んであります。

3　問題用紙は表紙を除いて7ページで，問題は一から四まであります。

4　開始の合図があったら，まず，問題用紙および解答用紙の所定の欄に**受検番号**を書きなさい。

5　答えはすべて**解答用紙の指定された欄**に書きなさい。

受検番号

一　次の(一)～(六)の問いに答えなさい。

(一)　次の1・2の文の――線部の漢字の読みがなを、それぞれ書け。

1　果敢に挑戦する。　　2　郷土の誉れとなる。

(二)　次の1・2の文の――線部のカタカナを、それぞれ適切な漢字に直して書け。

1　条件をレッキョする。　　2　一歩シリゾく。

(三)　次の行書で書かれた漢字の部首の名称を、**ひらがな**で書け。

(四)　次の**ア**～**エ**それぞれの熟語の組み合わせのうち、二つの熟語の関係が対義語となっているものを一つ選び、その記号を書け。

ア　倹約　―　節約　　**イ**　恒久　―　永遠

ウ　質疑　―　応答　　**エ**　消息　―　音信

(五)　次の文の――線部の「申し」は、敬語の「申す」という動詞が活用によって変化した語である。この敬語「申す」はここでの敬語としての使い方が適切ではない。この場面において「申す」を使うことがなぜ適切でないのか。その理由を、「主語」「謙譲語」の二つの言葉を必ず使って、**一文**で書け。

> 先生が私たちに「明日は遠足ですね。」と申しました。

(六)　次の詩とその鑑賞文を読み、後の**1**～**5**の問いに答えよ。

著作権保護のため掲載していません。

1　鑑賞文中の――線部1の「動い」の活用形を、次の**ア**～**エ**から**一つ**選び、その記号を書け。

ア　未然形　　**イ**　連用形　　**ウ**　連体形　　**エ**　仮定形

2　鑑賞文中の□に当てはまる言葉として適切なものを、詩の中から**四字**でそのまま抜き出して書け。

3　鑑賞文中の――線部2の「まるで」は、呼応の副詞である。この言葉と呼応の関係にある助動詞を、鑑賞文中からそのまま抜き出して書け。

4　詩の中の――線部の「かげ」はここではどのような意味で使われているか。その意味として最も適切な言葉を、鑑賞文中から**一字**でそのまま抜き出して書け。

5　詩の中で用いられている表現についての説明として**誤っているもの**を、次の**ア**～**エ**から**一つ**選び、その記号を書け。

ア　擬態語を用いて、うねる波と海雀を人工物のように表している。

イ　上下・大小の対比を用いて、空間的な広がりを感じさせている。

ウ　五音・七音の言葉や対句を用いて、詩にリズムを生んでいる。

エ　反復を用いて、海と海雀の繰り返される動きを印象づけている。

二　次の文章を読み、後の(一)～(四)の問いに答えなさい。

著作権保護のため掲載していません。

(一) 文章中の□に当てはまる言葉として適切なものを、文章中から**漢字二字**でそのまま抜き出して書け。

(二) 文章中の――線部**1**の「鳥の目でとらえ、虫の目で描く」とは、どういうことか。これと同じ趣旨のことを述べているものとして最も適切なものを、次の**ア**～**エ**から**一つ**選び、その記号を書け。

ア 挿画では、写真のように非常に美しいカラー写真で実物そのものを示すことはできないが、細部だけにこだわって対象を精密に描くことでその特徴を見事に表すということ。

イ 挿画では、写真のように技術を駆使して対象の像から取捨選択の操作をするというのではなく、画家の熟達した技術によって対象をありのままに描けるようになるということ。

ウ 挿画では、写真のように対象をカラー写真で美しく印刷するということはできないが、対象を客観的にとらえて、イメージを熟達した手描きの線で豊かに表現するということ。

エ 挿画では、写真のように均質の視線で精密に客観的に描くのではなく、人間が省略と強調という情報操作を行って、対象とするもの全体に共通している特徴を描くということ。

(三) 文章中の――線部**2**に「図が持っている情報量の多さというのは、文で描写する場合の比でないことは明らかです」とあるが、これはどのようなことから明らかであると言えるのか。その内容を、「解説文」「図版」の二つの言葉を必ず使って、**四十字**以上**五十字**以内で書け。ただし、句読点その他の符号も字数に数えるものとする。

(四) この文章の内容と構成を説明したものとして適切なものを、次の**ア**～**エ**から**一つ**選び、その記号を書け。

ア 初めに辞典に図を用いることにどのような意図があるかを説明し、次に具体的な形を示す図として写真よりも手描きの挿画を採用することの理由と利点を述べ、その後に挿画について再認識することになったエピソードを語っている。

イ 初めに図というものの特徴を取り上げてどのような働きをするのかを説明し、次に写真と挿画という二つの図についてそれぞれ具体的に辞書の中での用い方について述べ、その後に筆者が挿画を好きになったエピソードを語っている。

ウ 初めに事典（ことてん）と辞典（ことばてん）の特徴の違いを説明し、次に事典に比べて辞典のほうで挿画が特に重要な働きをすることになる理由を述べ、その後に個性豊かな挿絵画家との交流について筆者の経験を語っている。

エ 初めに物事の関係や形を言葉だけで表現することの難しさや図を用いることの利点を説明し、次に図の中でも手描きの挿画の味わい深さがいかに辞典に個性を与えるかを述べ、その後に挿絵画家の個性について語っている。

三　次の文章を読み、後の(一)・(二)の問いに答えなさい。

著作権保護のため掲載していません。

(一) 文章中の――線部1に「遠い自然というのは近い自然と同じくらい人間にとって大切なのだと思います」とあるが、その理由を筆者はどのように述べているか。次の**条件1・2**にしたがってまとめよ。ただし、句読点その他の符号も字数に数えるものとする。

条件1 全体を**六十字**以上**八十字**以内にまとめること。

条件2 「近い自然」と「遠い自然」を対比する形で書くこと。

(二) 文章中の――線部2に「僕はそれでいいんだと思うんです」とあるが、この言葉は、筆者のどのような考えに基づいているか。また、そのような筆者の考えについて、あなたはどう考えるか。次の**条件1～3**にしたがって書け。ただし、句読点その他の符号も字数に数えるものとする。

条件1 全体を**八十字**以上**百字**以内にまとめること。

条件2 最初に、筆者の考えを「理想」「現実」の二つの言葉を使って説明し、次に、それに対する自分の考えを書くこと。

条件3 自分の考えについては、必ず、なぜそう考えるかという理由を明らかにして書くこと。

四　次の文章を読み、後の(一)～(四)の問いに答えなさい。

伏見中納言と[1]いひける人のもとへ、西行法師、行きてたづねけるに、あるじはありきたがひたるほどに、侍の出でて、「何事いふ法師ぞ」と言ふに、縁に尻かけて[ア]居たるを、「けしからぬ法師の、かくしれがましきよ」と[イ]思ひたるけしきにて、侍ども、にらみおこせたるに、簾の内に、箏の琴にて秋風楽をひきすましたるを[ウ]聞きて、西行、この侍に、「物申さん」と[エ]言ひければ、「憎し」とは思ひながら、立ち寄りて、「何事ぞ」と言ふに、「簾の内へ申させ給へ」とて、

[2]ことに身にしむ秋の風かな

と言ひでたりければ、「憎き法師の言ひ事かな」とて、かまちを張りてけり。西行、はうはう帰りてけり。

後に、中納言の帰りたるに、「かかるしれ者こそ候ひつれ。張り伏せ候ひぬ」とかしこ顔に語りければ、「西行にこそありつらめ。ふしぎの事なり」とて、心がられけり。

この侍をば、やがて追ひ出だしてけり。　（『今物語』による）

（注）西行法師…平安末期・鎌倉初期の著名な歌人。
ありきたがひたるほどに…出かけていて、行き違いになってしまった時に。
けしからぬ法師の、かくしれがましきよ…怪しげな法師がこのように人目も気にせず勝手気ままなありさまでいることよ。
簾の内…すだれで隔てた室内。　箏の琴…十三弦の琴。　秋風楽…雅楽の曲名。
かまちを張りてけり…頬をなぐった。
かかるしれ者こそ候ひつれ…このような勝手気ままな振る舞いをする愚かな者がおりました。
ふしぎの事なり…とんでもないことをしたものだ。
心がられけり…つくづく情けなくお思いになった。　やがて…すぐに。

(一)　文章中の――線部1の「いひける人のもとへ」を現代仮名遣いに直して、――線部全部を**ひらがな**で書け。

(二)　文章中の＝＝線部**ア**～**エ**の言葉のうち、行為をする者が他の三つとは異なるものを**一つ**選び、その記号を書け。

(三)　文章中の――線部2の「ことに」は、ここでは掛詞が用いられているが、「格別に」という意味のほかに、意味をもたせている言葉を、文章中から**漢字一字**でそのまま抜き出して書け。

(四)　この文章で述べられている内容と合っているものを、次の**ア**～**エ**から**一つ**選び、その記号を書け。

ア　伏見中納言は、自分の留守中に訪ねてきた西行が、家の中にいる人にいきなり声を掛けるという無礼な振る舞いをしたと侍から聞かされ、西行の心無い行為を情けなく思った。

イ　伏見中納言は、自分の留守中に訪ねてきた西行が名乗りもしないうちに、侍が頬をなぐって追い返したと聞き、風流さもなくほうほうの体で逃げ帰った西行を情けなく思った。

ウ　伏見中納言は、自分の留守中に西行が訪ねてきた時に、風流心のない侍が西行の言葉の意味を理解しないばかりか、彼に乱暴まで働いてしまったと聞いて情けなく思った。

エ　伏見中納言は、自分の留守中に西行が訪ねてきた時に、琴を弾いて接待をした侍が、西行が言葉をかけたことにひどく腹を立てて暴力をふるったと聞いて情けなく思った。